

# 巨椋池周辺の遺跡と歴史

京都市考古資料館 山本 雅和

## はじめに

- ・巨椋池：山城盆地中央（現在の京都市伏見区・宇治市・久御山町・八幡市にまたがる範囲）にかつて存在した池  
桂川・宇治川・木津川の水を集める遊水池として機能
- ・干拓前は周囲約 16 km、水域面積約 800ha、平均水深 0.9m、水面の標高約 10～11m
- ・巨椋の 入江響むなり 射目人の 伏見が田井に 雁渡るらし（『万葉集』卷 9－1699）  
←江戸時代は「大池」と呼称

## 1. 巨椋池をめぐる先行研究

### ①土木工事による改変

- ・桃山時代から江戸前期【図 1】  
宇治川の流路変更（槇島堤・淀堤の構築）  
向島周辺の改変（太閤堤の構築、向島城の築城）  
淀周辺の改変（旧淀城・淀城の築城、木津川の付け替え）  
桂川の流路の変化
- ・明治期【図 2】  
木津川の付け替え（1868）  
桂川・宇治川・木津川の河床浚渫、三川合流事業（1896～1910）
- ・昭和期  
第一次国営開墾事業としての干拓事業（1933～1941）  
→巨椋池の消失

### ②中世以前の巨椋池周辺地域

- ・実態の精査は干拓事業前の状態（＝桃山時代以降の改変の影響を受けた状態【図 4】）
- ・交通  
宇治橋・山崎橋・豊後橋（観月橋）  
宇治津・岡屋津・伏見津・鳥羽津・与等津（よどつ）など水上交通の要所
- ・建造物  
神社・寺院・別業などの施設

- ・周知の遺跡
- 条里制地割
  - ←律令国家による土地支配
  - 室町時代の城館・環濠集落
    - ←主として文献・歴史地理学の成果に依拠して範囲を確定

## 2. 地質・地理からの検討

### ①断層【図3】

- ・京都盆地の東西に南北方向の活断層
  - 盆地部分は沈降
- ・宇治川断層
  - 東西方向の断層（北が高い）
  - 基盤岩で約120～200mの高低差　　沖積層でも1～2mの地形変化がある
- ・巨椋池の位置
  - 東側は桃山丘陵・醍醐山地・宇治丘陵、西側は天王山・男山で区画→内側が沈降
  - 北側は宇治川断層による段差→南側が沈降
  - 南側は緩やかな傾斜

### ②地形の変化

- ・京都盆地の沈降
  - およそ28万年からは平均0.1m／1000年
- ・沖積層の沈降
  - およそ1万年間に約13mの堆積→平均1.3m／1000年
  - 沈降速度は細部の状況で異なる（巨椋池内では2m以上／1000年の地点もある）
  - ←広域火山灰の検出深度

## 3. 巨椋池周辺地域の遺跡調査成果【図5】

- ①東部（六地蔵から木幡）
  - ・西浦遺跡
    - 標高15m付近に古墳時代後期以降の遺跡
  - ・寺界道遺跡
    - 標高20m付近に縄文時代晚期の墓、古墳時代後期以降の集落
- ②南東部（宇治周辺）
  - ・宇治市街遺跡
    - 標高15m以上で縄文時代以降の様々な遺跡

- ・矢落遺跡

標高約 12m で鎌倉時代以降の遺跡 江戸時代は水田

下層は砂層と自然遺物の堆積→巨椋池が拡がっていた

古墳時代中期の集落・平安時代の邸宅を発見→巨椋池の岸辺が北に隔たっていた

- ③南部（小倉から久御山）

- ・若林遺跡

標高 25m 付近で弥生時代から古墳時代の集落

- ・春日森遺跡

標高 9 m で平安時代後期から鎌倉時代の遺跡

下層は池の堆積→巨椋池が拡がっていた

- ・市田斎当坊遺跡【図 6】

標高 9 m 付近（干拓前の巨椋池南岸に近接）で弥生時代中期から古墳時代の拠点的集落

弥生時代中期中葉が中心

約 100 棟の竪穴住居 2 基の木組井戸（国内最古段階）多数の方形周溝墓

→周辺に耕作地が拡がっていた可能性

石器生産【図 7】

石庖丁・石剣・磨製石鏃の製作←大量の原石（複数の石材）・剥片・未成品

玉作り【図 8】

管玉の製作←大量の原石・剥片・未成品 石針（孔をあける石器）の製作

平安時代以降は耕作地として安定的利用

- ・佐山遺跡【図 6】

標高 11m 付近で弥生時代後期から古墳時代中期、奈良時代以降の集落

- ・佐山尼垣外遺跡【図 6】

標高 10m 付近で弥生時代の集落

平安時代以降は耕作地として安定的利用

- ・林寺跡

標高 11m 付近で弥生時代・飛鳥時代・平安時代から鎌倉時代の遺構

- ④南西部（木津川旧流路南西側）

- ・金右衛門垣内遺跡（八幡市美濃山）

旧石器（ナイフ形石器）が出土

- ・内里八丁遺跡

標高 10.5～11m 付近で弥生時代後期から古墳時代前期の水田 洪水砂の堆積

標高 11.5m 付近で古墳時代以降の集落

慶長京都地震の噴砂

- ・上奈良遺跡

標高 11m 付近で古墳時代前期の水田、奈良時代の集落

中世以降湿地の堆積

- ・木津川河床遺跡

標高 8 m 付近で弥生時代後期から古墳時代前期の集落

標高 8.5m 付近で古墳時代後期から飛鳥時代の集落

平安時代以降は耕作地として安定的利用

西部では標高 7 m 付近で鎌倉時代の土壙墓を検出

明治期の水制（すいせい）

⑤西部（淀周辺）

- ・淀城跡

標高約 10m 以下で平安時代から室町時代の包含層

江戸時代の淀城と城下町の築造による河川の付け替え・地形の改変

⑥北部（三栖から伏見）

- ・下三栖遺跡

標高約 8 m で古墳時代後期から奈良時代の集落

標高約 10m で平安時代後期から室町時代の集落

- ・富ノ森城跡【図 9】

標高 8.5m で鎌倉時代後半の井戸など

標高約 9 m で室町時代前期の整地層

標高約 9.5m で安土桃山時代の洪水層

- ・伏見城

城下町造営前の遺跡はほとんどない（遺物は出土） ←城下町造営による削平

標高 20m 以上で弥生時代の方形周溝墓

標高約 14m で奈良時代の堅穴住居・室町時代の集落

⑦中島（向島周辺）

- ・向島城・太閤堤

検出遺構はすべて桃山時代以降→室町時代をさかのぼる遺跡が存在しない可能性が高い

#### 4. 古代巨椋池周辺地域の景観

①東部（3-①・3-②）

- ・集落

丘陵斜面に立地（標高 15m 以上） → 水域の変化の影響は少ない

洪水による土砂の堆積

・墳墓・古墳

丘陵に首長墓・群集墳

②南部 (3-③)

・集落

丘陵上・丘陵斜面・沖積地の微高地（標高 10m 以下）に立地

周辺の沖積地に耕作地が 拡がる

・墳墓・古墳

集落に隣接する方形周溝墓

首長墓は南側（男山丘陵または久津川）か？

③南西部 (3-④)

・集落

丘陵上・丘陵斜面・沖積地の微高地（標高 10m 以下）に立地

周辺の沖積地に耕作地が 拡がる

南部と同様の遺跡分布→木津川の自然堤防の形成は新しい可能性

・墳墓・古墳

男山丘陵に首長墓・群集墳

④北部 (3-⑥)

・集落

沖積地微高地（標高 9 ~ 14m）に立地

・墳墓・古墳

集落に隣接する方形周溝墓・低墳丘墓（中には埴輪をそなえるものもある）

桃山丘陵に首長墓・群集墳

まとめ

- ①古代の巨椋池周辺地域は水域の変化による影響を受けていた=水陸漸移帶。この状況は南部・南西部により顕著にあらわれる
- ②古代の巨椋池周辺地域では岸辺の微高地に立地する遺跡が存在する。北部・南部では標高 10m 以下の未知の遺跡の存在が推定できる。
- ③古代の巨椋池周辺地域の遺跡は東部・南部・南西部・北部に分けることができる。南部・南西部は立地環境から一つにまとめることも可能である。
- ④伏見城・太閤堤、淀城の築造にともなう大規模な土木工事により巨椋池は大きな変容を遂げる【図 10】。

## 主な参考・引用文献

- ・『巨椋池干拓誌』巨椋池土地改良区 1962 年（1981 年追補）
- ・平良泰久「南山城」『日本の古代遺跡 京都 I』保育社 1986 年
- ・坂本博司『巨椋池』宇治市教育委員会 1991 年
- ・山中章「南山城と古代遺跡」『日本の古代遺跡 京都 II』保育社 1992 年
- ・「下三栖遺跡」『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年
- ・伊藤淳史「山城地域における弥生集落の動態」『みずほ』大和弥生文化の会 2000 年
- ・「下三栖遺跡」『平成 11 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- ・『京都市の活断層（第 2 版）』京都市消防局防災対策室 2002 年
- ・伊藤淳史「弥生時代墓制の展開－山城地域を中心として－」『弥生時代の墳墓と祭祀』京都府埋蔵文化財研究会 2003 年
- ・『京都府遺跡地図〔第 3 版〕』第 3 分冊・第 4 分冊 京都府教育委員会 2003 年・2004 年
- ・『京都府遺跡調査報告書 第 31 冊 佐山尼垣外遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001 年
- ・『京都府遺跡調査報告書 第 33 冊 佐山遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 年
- ・『おぐら池－入江、大池、巨椋池－』宇治市歴史資料館 2003 年
- ・『京都府遺跡調査報告書 第 36 冊 市田斎当坊遺跡』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004 年
- ・秋山元秀「巨大な池が近郊都市に－巨椋池干拓地」『近畿 I 地図で読む百年』古今書院 2006 年
- ・「長岡京跡第 583 次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 27 年度』京都市文化市民局 2016 年
- ・『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011－7（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2021 年
- ・『京都市遺跡地図【第 10 版】』京都市文化市民局 2020 年
- ・『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020－6（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2021 年
- ・『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021－8（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2022 年
- ・『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021－16（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2022 年
- ・『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2023－9（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2024 年
- ・京都学研究会編『京都を学ぶ【洛南編】－文化資源を発掘する－』ナカニシヤ出版 2025 年
- ・中谷正和「京都盆地南西部、淀周辺の旧河道について－桂川下流域を中心に－」（京都を学ぶセミナー【洛南編】発表資料） 2025 年

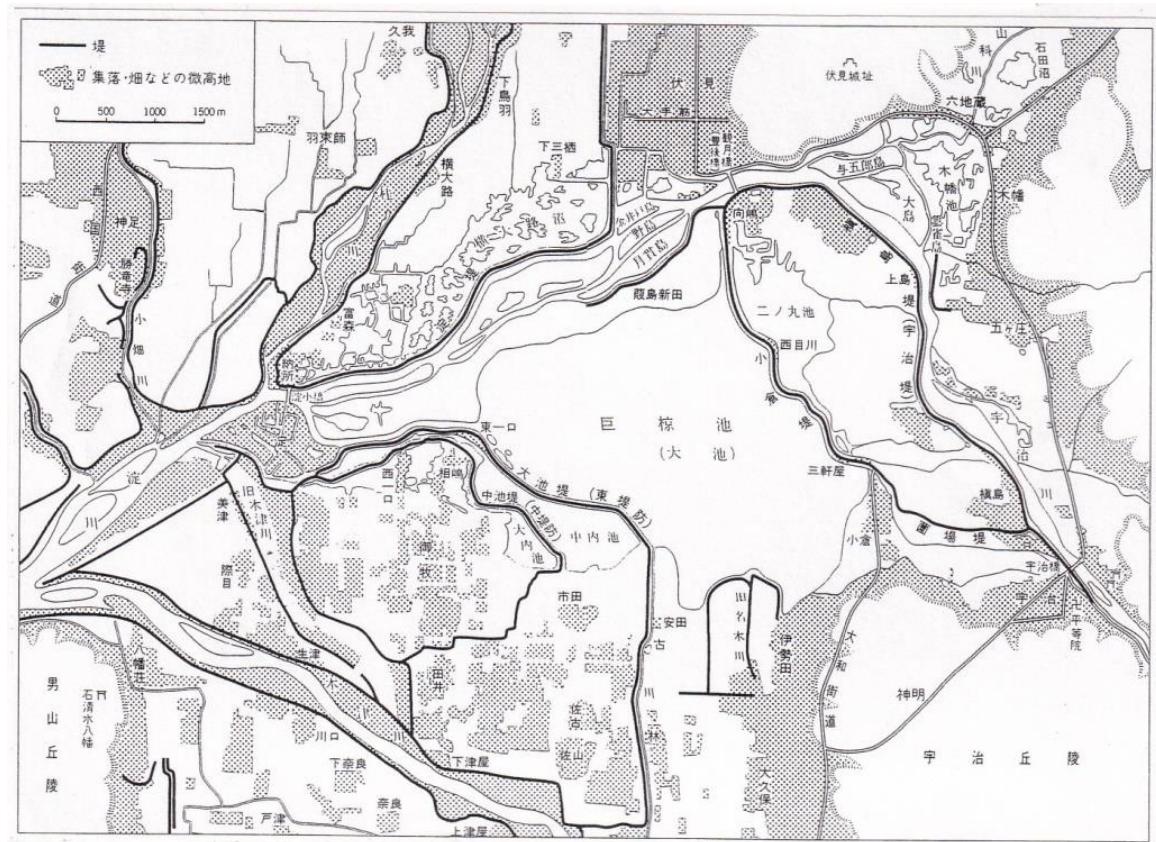


図 1 巨椋池周辺の堤防

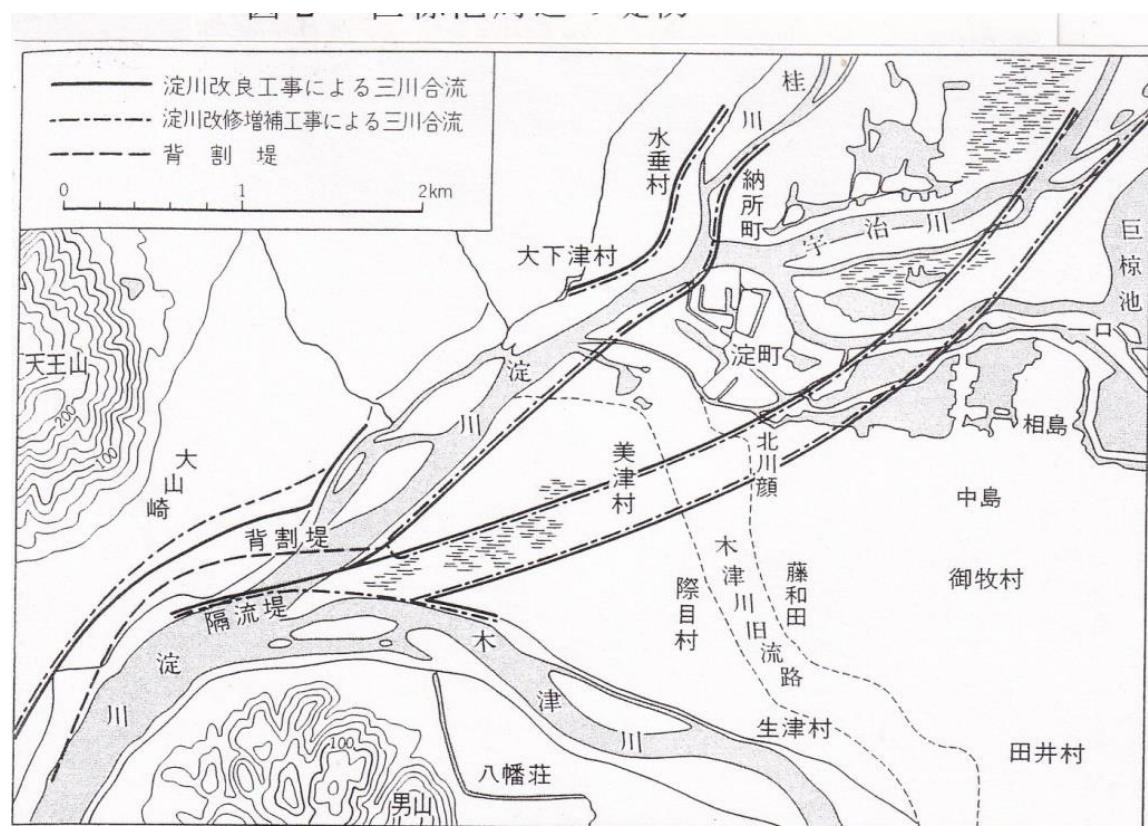


図2 三川合流点付近の川道付け替え

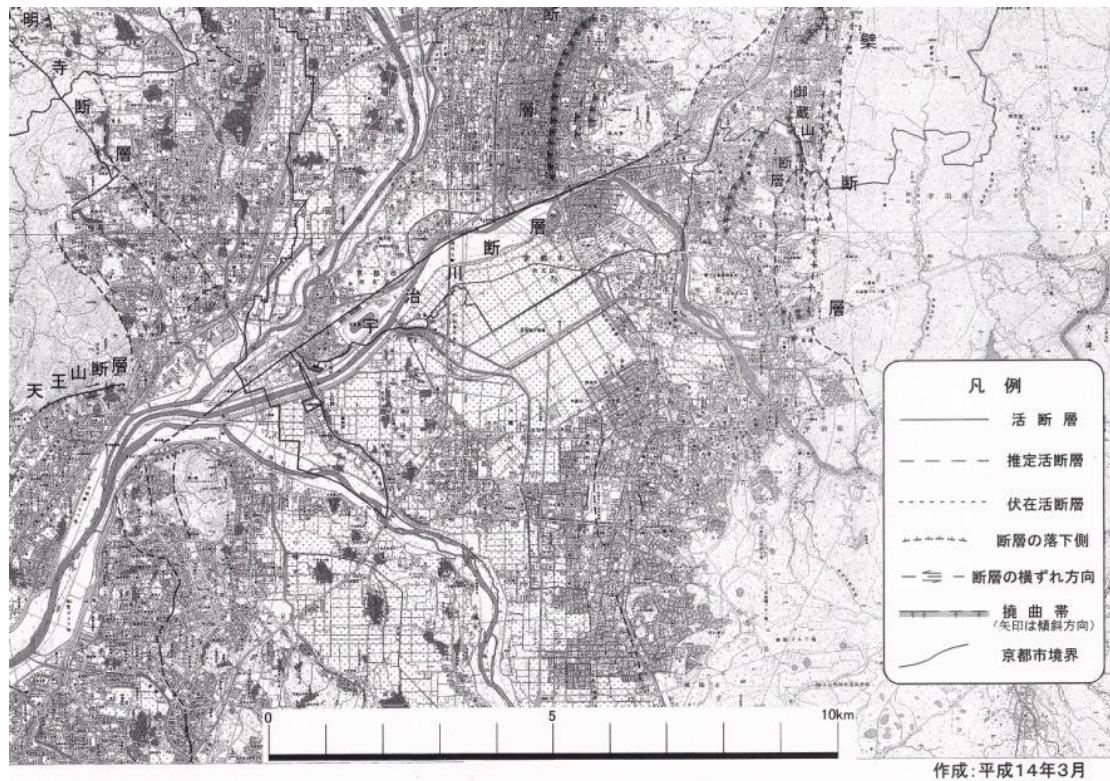


図3 宇治川断層（京都市消防局防災対策室 2002年）



図4 巨椋池周辺地図（1889年）

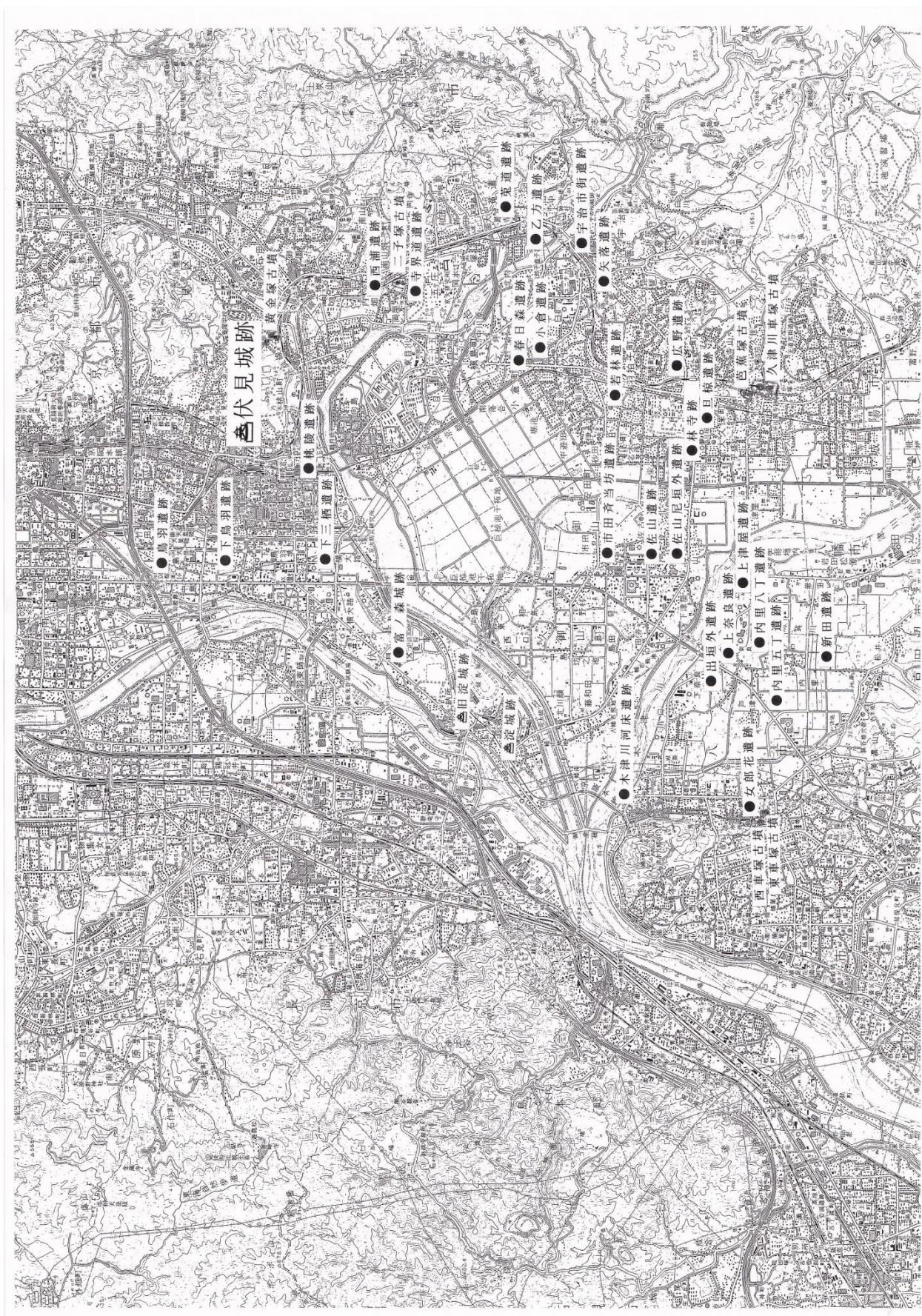


図5 巨椋池周辺の遺跡

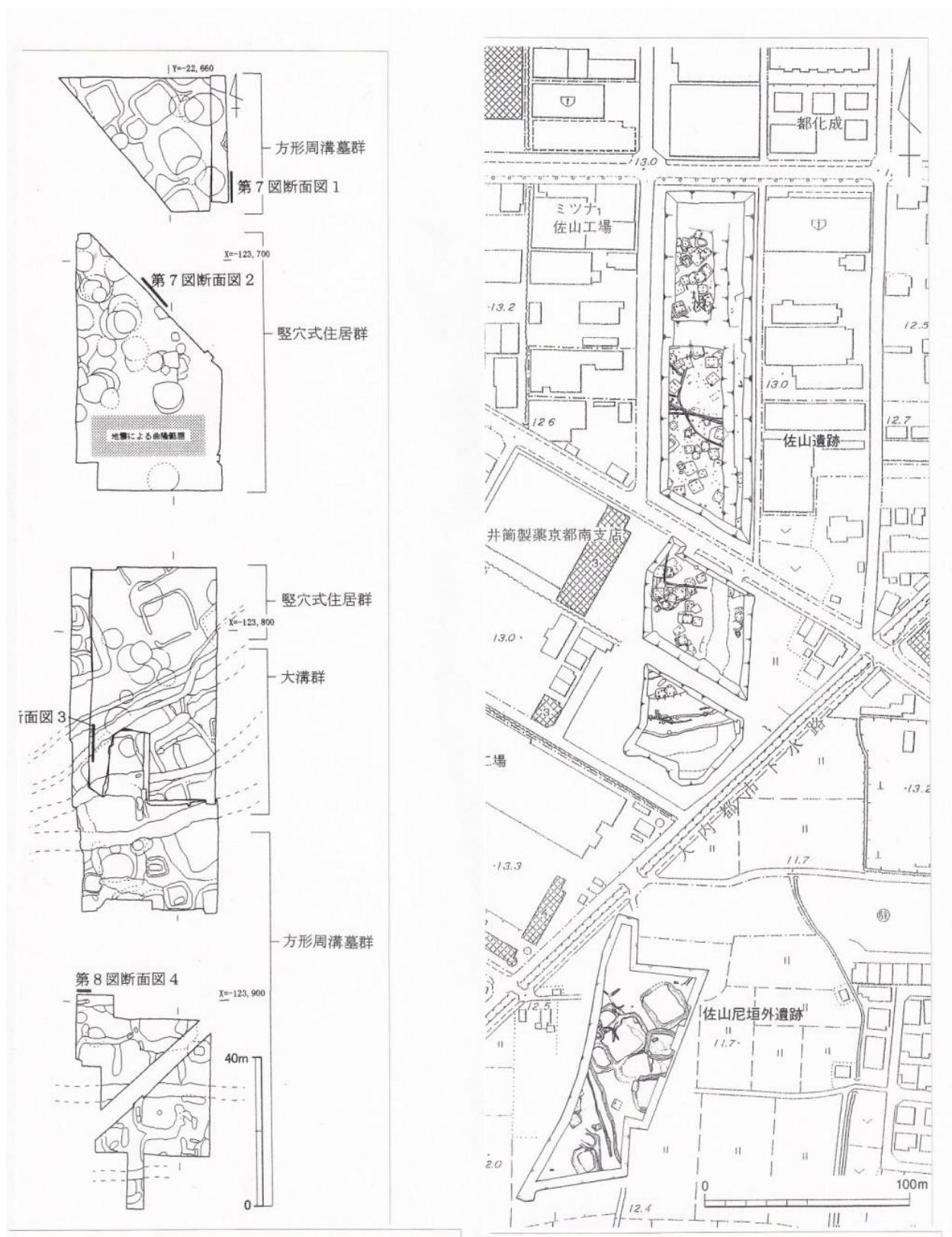


図6 市田斎当坊遺跡遺構略図（左）・佐山遺跡・佐山尼垣外遺跡遺構略図（右）

（京都府埋文センター 2003・2004）



図7 市田斎当坊遺跡出土 磨製石劍（京都府埋文センター 2004）



図8 市田斎当坊遺跡出土 玉作り関連遺物（京都府埋文センター 2004）



図 9 富ノ森城の調査（鎌倉から室町時代 南西から 京都市埋文研 2021）

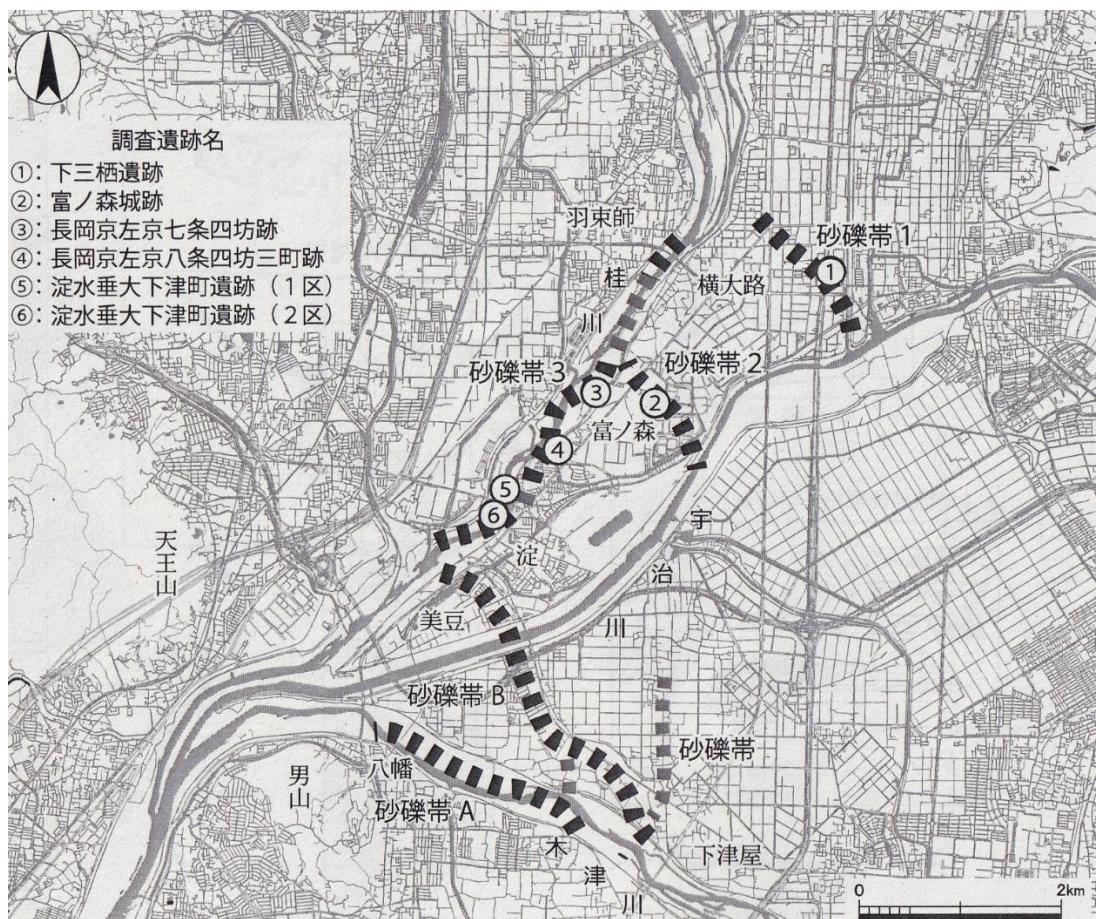


図 10 京都盆地南西部の地下砂礫帯（中谷 2025）